

『オフ会しませんか？』

この僕、ハンドルネーム有坂——これは昔に遊んでいたロボットバトルゲームに出て来る架空の企業名から取ったものだ——一般的なゲーマー社会人である僕にはそれなりに多くのゲーム友達や遊び友達が居る。同じゲームを通じて繋がった仲間や、そこから更に広がった別な趣味の友達、どちらにせよ基本的には大人しい人や自分の趣味に忙しい人が多いのもあってか連絡の頻度は然程多くない。人によっては数ヶ月単位で話さないまま、何かの折にメッセージを送り合うという事はしばしばある。新作発売だとか、相手がSNSで呟いていた内容だとか、きっかけはそれぞれだが、それは極自然な事だった。

そんな友人達のうち、1人から突然メッセージが届く。

『華奢で可愛い女の子って好き？』

しばらく連絡がなかったネットの友人から送られてきた言葉はシンプルだった。

久々の会話の割に脈絡の無い内容から始まる事が多い。ネット越しで出逢ったとはいえ友人同士、同じ好きな物を分かち合った友人同士であれば特段気を使う必要もない。僕はそのまま『わかる、好きだわ』なんて思い付いたままの短文で返す。会話自体は数週間か数ヶ月振りのご無沙汰だったが、別にかしこまった言葉だとか仰々しい前置きが要る程に縁遠い関係ではない。それこそ、時期やお互いの興味の噛み合い次第では夜通しメッセージでゲームやキャラクターについて語り合う様な中の友人だったと覚えている。

数ヶ月に渡る何気ないやり取りの後、性癖やらの会話もする程度には親睦も深めていたが、ここからは少しずつ会話に間が空き、お互いの生活からやり取りという過程がフェードアウトしていった。あちらが忙しくなってきたらしい事を言及していたのは覚えている。しばらく返信できないかもだとか、ちょっと余裕がないだとか大変そうな言葉を心配したのは覚えている。その度返ってくる大丈夫という言葉に、詮索しすぎるのも良くないだろうと僕はメッセージの送信を止めたのだ。何度か、様子を伺ったり余程好きそうな物があれば送ったが、そこから先はスタンプだけの返信だったり、レスらしいレスはどんどんなくなって程なく途絶えてしまったのを覚えている。

そんな間が開いた期間での時間を取り戻すかのように、お互いに言葉を交わし合う。文字でのやり取りだが、こちらが好きなキャラクターや女子のタイプを正直に話せば、あちらも趣味が合うのか『分かる～！』などと同意の言葉を返してくれる。そのままより踏み込んで、『好みの服とかはどう？』『体型は？』などと事細かに質問される。『好きな子当ててみよっか、このイラストの子とか好きでしょ？』なんてイラストも送られたり、それが実際ずばりの中していたりと大盛り上がりしてしまう。

そんなやり取りが大盛り上がりした後、5日程後に急に2日程音信不通になって、無言の時間が続いた後にふと通知が着て、見れ見ればその言葉が端末には浮かんでいた。

「オフ会かぁ……悪くないね」

会った事も無い相手だが、前向きに予定を詰める気になれる程度には魅力的な提案だった。行き先もまあ無難なオタクの街遊びとカラオケ、鉄板な所だろうと思うし、久々に趣味が合う人間とはっちゃけるのも悪くないかも知れない。カラオケなら、積もる話もしやすいだろう。趣味の話だって弾むこと請け合いだ。好きな曲さえ入れれば、きっと2人で大盛り上がりできる。これまでと直近数日こそ、チャットもまばらでご無沙汰だったがそれはそれ、むしろその話も内容次第ではしたっていい。身の上話が駄目でも、ゲームの話や創作界隈の話、共通の友人の話でもすれば十二分に楽しい休日が待っているだろう。

きっと、時間が瞬く間に溶けてしまう程に違いない。

「うん、やっぱり良いな」

返信を考える間にも、飛んでくる『どうかな？』の追撃。余程余裕が開いているのか、ひょっとしたらその日の分まで残業とかで忙しかったのかも知れない。だとしたらますます乗らないと申し訳ないだろう。

送られ続ける予定調整の問いかけ。随分とモチベーションが高そうなレスの嵐に、僕も『行きたい！』と本心のままに返答する。嬉しそうな女の子のイラストが書かれたスタンプが貼られて、続くあちらも喜んでいそうな文面。これまでの音信不通を思えば、ようやく生活に余裕を作った先の遊び相手に僕を選んでくれたのかも知れない。そうでなくとも、以前の様に頻繁にメッセージを投げ合える距離感に戻れた様で嬉しかった。矢継ぎ早に送られてくる調整のメンションを返しつつ、しばしば投げ掛けられる提案に『良いね！』サインを押しては返答する日々が続く。意気揚々と、日取りは決まりきってしまった。

『折角なら休日が良くない？ 次の日休みの土曜日とか！』

「その日は大丈夫、良さそう！」

『わあ、良かった！ 時間は？ 10時とかでどう？』

相手も超乗り気、トントン拍子で話が進む。相手から話を進めてくれる分、こちらの持ちうる選択肢を並べるだけで話が自然と纏まっていく。そこから先の確認もトントン拍子に進められ、気が付けば程無くしてスケジュールが決まりきってしまう。週末の空いてる日にはすっぱりと1日、昼から晩まで食事とカラオケなんていう、オーソドックスなおたく友達オフ会の予定がしっかりと出来上がっていた。

改めて予定をメモしておく。集合したら少し電気街で買い物、昼御飯を食べてからはカラオケでもしながらゆっくりワイワイ過ごす。その後はよしなに流れで解散なり晩ごはん。電車の路線もバッチリ把握済み、待ち合わせ場所も既に決定。内容自体は別にカラオケでなくともよかったが、あちらが猛烈にプッシュしてきたのもあり僕も賛成した。

「あいつ、そういうの好きだったんだなあ」

その日はそんな事をぼやきながら就寝する。

そして、そこから数日間はいつもの日々に明け暮れながらその日を待った。

「どんな人だったかああ、あの人」

ぼんやりと思い返しながら瞳を閉じる。

確か、その姿は僕と同じ位の背格好の男で、確か――。



――数日の時を経て、気が付けば当日。

僕はスッキリと目覚めたので何の問題もなく電車に乗った。相手も相手で無事に起きれたらしく、スマホのメッセージアプリには『今から行くね！』というメッセージ付きのご機嫌そうなネコのスタンプが添えられていた。そこはかたなくキャピキャピした印象、元からそこはかたなく性別不詳っぽいネットでの口振りだった気がする。

まさかリアルでもそんな感じで、女装でもして来るんじゃないかという怖さがある。それが微妙だった時、ちょっと並んで街を歩くのは気恥ずかしい。正直勝手にする妄想としては随分と失礼な気もするが、不安0の状態という訳にはいかない。

(一体……どんな格好で来るんだ？)

吊り革に掴まりながら、送られてきたスタンプに対し、今向かってる旨を返信する了解の返信を返した後、僕は取り留めのない過去のやり取りを見返しながら相手の容姿や雰囲気想像してみる。少し怖いけど、楽しみでもある瞬間だ。

確か、以前一緒に参加するブラウザゲームで同じパーティだった時の作戦会議で通話した事がある。どんな編成やスキルが良いみたいな話をした時、何度か話した程度だがその打ち合わせで喋った記憶を思い出す限り、声は男声だった気がする。特別印象に残る美声という訳でもなく、低くも高くもない、いやちょっと高いか？ という程度の癖のない声だった様な気がする。とはいえ人の声なんて記憶の中でも忘れやすいもの、特別記憶力に自信がある訳ではない。

とはいえ、自信がないなりに男だったであろう事は覚えている。好きなキャラクターやシチュエーションへの語らいから転じて、性癖やオカズなんかの話もした覚えがある。その時はそれなりに気が合う印象だったけど実際の所はどうだろうか。やたら大きかったりガラが悪いと怖いな、と思ってしまう。人の声というのは背格好である程度は決まるという話もあるが、それなら普遍的な体格なのだろうか、とはその声の高さ度合いから察せる。

その推理が当たるかは定かではないが、合流までの良い暇つぶしだった。

電車の中には色んな人がいる。向かう先がこの国有数のオタクの街だけあって、随分と派手な巻き髪をした美人な女性も居れば、逆に瓶底眼鏡に大きなリュックのチェックシャツ姿でタオルのハチマキなんて、近年稀に見る絶滅危惧種の様な典型的なオタクルックの男性も居た。しかし、不思議と見渡す景色の中には美人な女性が多い気がする。最近では以前よりもやはり病で店が閉じたのもあって、一部の店を除けば残っているのはコンカフェや風俗が殆どという寂しい記事も見た気がするが、それにしても極端に思う。右の座席はすっきりとした顔立ちの港区にでも居そうなハイブランドに身を包んでいる美女、左は左で缶バッチだらけの板バグを抱えている顔立ちは整っているヘッドホン女子だった。

(まあ、むさ苦しいよりは良いかな……痴漢冤罪には気をつけないと)

ぼんやりと末恐ろしいトラブルなんかを妄想しつつ、怖いだけなので思考を戻す。

結局待ち合わせ相手はどんな人だろう、もしこんな左右の美女みたいな相手なら、まるでデートみたいな絵面になってしまうだろうか。有り得ないにせよ、そんなもしもを考えてしまう。そうこうしている内に、電車は後数駅で着きそうな最寄り駅まで進んでいた。

何にせよ、一緒に居て気まずい様な相手じゃなければ大歓迎だ。

僕自身、趣味も合う人間ならば余程の事じゃなければ大丈夫だろうと思いたい。これまでのトークを思い出して語らうだけでも、きっとどこちなさは解消できる。その上で次に来る新作のゲームの話でもすれば、きっとすぐに打ち解けられるだろう。そんな見通しを立てつつ、僕なら大丈夫という自己暗示の様な言葉を内心に呟いて、僕はその不安にも繋がりがねない妄想遊びを打ち切った。

時間を確認しようと取り出したスマホの画面に、いつものSNSが表示されている。

時刻としては問題ない、後一駅で降車駅だと伝えるアナウンスが響く。

「あれ？ こんな人フォローしたかな……」

偶然目に飛び込んだのは、見た事もない自撮りアカウントだ。

何かの拍子に誤操作したのだろうか、小柄で線が細いながらもしっかりと抑揚のある身体付きの少女の全裸同然のバスタオル姿、その写真の人物に覚えはない。イベントの時にでもコスプレイヤーをフォローしたとか、そうだとしても記憶がない。その写真は余りにも目に毒で、僕はひとまずその画像を画面外へと指先で流し、一旦今は見なかった事にして忘れる事にした。なんかの折にお世話になるかも知れないし、ブックマーク位は押せばよかったと思いつつもそれは瞬く間に消えてしまう。このSNSの悪い所だ、ひとつ嘆息を零した。

(しかし、なんだか最近本当に多いなあ……この手のアカウント)

ここ数ヶ月、以前にも増してやたらと多く流れてくる気がする。フォローしてくるプロフを見れば会いましょうとか連絡先はこちらと、怪しいリンクが添えられている様なアカウント。SNS自体が承認欲求を満たすのに都合がいいツールとはいえ、そういった人ばかりをフォローしている訳では無いアカウント、僕のタイムラインまで5人に2人くらい、勝手にサジェストされた半裸や全裸、裸より恥ずかしそうな恥部だけを隠す様な服装の女子が流れてくる。ギャルやOLの自撮りなんかも増えたとし、ブロックやミュートの機能を活用しようやく、以前の様子に戻って来るといった様相だ。

何年か前から広告も増えたとし、オススメの改悪も続いてタイムラインのノイズが増えたとはいえ、余りに多い気がするそれらを幾つかブロックしつつ、僕はタイムラインを眺めてみる。新作の情報や、他のプレイヤー達の使用キャラクターなんかの事前情報集めは、こういった時の良い暇つぶしになってくれる。

「……あれ？」

その作業中、ひとつの違和感に気付いた。

タイムラインの浄化の過程、ブロックしようとした相手が相互フォロワーだったのだ。

(こんな人、フォローしたかなあ……)

例によって、そのアカウントも脱ぎかけの学ラン姿で男を誘う様な文言を呟いている。

コスプレにしては手が込んでいる、疑問に思いつつ保留にした。

——とはいえ、その1人だけに留まらないのが猶、奇妙な所だった。

続くもう1人は部屋着姿、鏡を使った自撮り写真。パーカーから覗く白い肩と、ひょっとしたら下着かもしれない臍出しのトップス。ホットパンツから覗くベルトと脚の隙間が蠱惑的だが、顔はスマホを持つ右手に隠れて良く見えない。豊満な胸はトップスから零れそうな起伏のまま、雪の様に白い柔肌を存分に晒している。食い込むまま歪みつつ、ふっくらと軟い曲線を描く豊満な胸を左腕で寄せる様に持ち上げている姿は実に蠱惑的だ。仕草も伴い、2つの乳房が腕の中で真一文字の谷間を作り、自然と視線を吸い寄せる。

(よくこんな写真をあげられるな……しかし、本当に誰だろう……)

いつフォローしたか分からない、電車ももう目的地目前だしこちらも保留。

更にもう一人、丁度この前会ったフォロワーさんと同じハンドルネームだった。僕が会った相手はまごう事なく男性で別人だが、その奇妙な偶然にやたらとその投稿が目についた。確かあの人はあの人で典型的なオタクで、何年か前に放映していたアニメアイコンを今も変わらず使っている筋金入りのオタクだ。だからこそ、随分と怪しげな口元アップの自撮りアイコン、今にもしゃぶりますよとも言いたげなこのアカウントは別人で確定だ。

その割には、不思議な違和感があるにはある。目元にあった泣き黒子の位置、目の垂れ具合は不思議と合致している。最新の投稿では、コスプレ姿で映っている。これまた偶然にも、それは同名のあの人が好きだった推しキャラクターに瓜二つだ。彼にオススメされたコスプレイヤーのアカウントだったか、なんて思うもそれにしては爛れている。自撮りは全部、映えや原作再現よりも淫らさ重視、その着崩した様子や添えられた『なんか寂しくなってきた』や『見て』なんてメッセージや原作にはある台詞だがポーズがかけ離れている『素敵な魔法で叶えてあげる』なんて言葉はどれも男を誘う内容に思えてしまう。

(うわ、部屋の中まで丸見えだ。絶対これ、良くないですよお)

コスプレ衣装に比べて、私服らしい服装は女っ気の薄いだらしないヨレヨレのTシャツ。背景に映る部屋はフィギュアやマンガだらけの棚が並ぶ分かり易いオタク部屋、ドレッサーなんかは見取れないし、まるで男の部屋みたいだった。床には乱暴に破られた食玩の箱に混じり、ディルドやローターなんかの箱まで丸見えになっている。床に寝そべる写真を撮るために強引にどかしたのだろうという散らかりよう。

その割には、部屋の主の髪は乱れていないし不衛生な印象はない。

整った容姿の美女には不釣り合いな部屋の中、鏡には窓際に干されたトランクスまで映っているが彼氏か誰かの部屋なのだろうか。大腿開きで床に寝そべりフレームアウトした股座に指を添えている写真に続き、次の写真はベッドの上。抱き枕3本を壁に立てかけ開けたスペースの真ん中に座る姿を映した写真。添えられたコメントは『目が覚めたら美少女だった件について』などと書かれており、乱れたブカブカのTシャツ姿に胸の形が浮き上がる様に胸を掲げて、真横からその膨らみの大きさを示す様な写真だった。やはり随分と胸が大きい。コスプレの時点で、元のキャラクターへの冒涇というくらいには大きい。そんな巨乳の美少女がこちらへと、物憂げな眼差しをじっとりと向ける様子は随分と色めかしい。それこそ昨今しばしば見かけるTS、女体化ものの作品で見かける様なメッセージは妄想を昂らせる。少なくとも、同じ名前だった先日あったフレンドの姿が邪魔をしない程度には、全てがどうだって良くなるくらいの美少女だった。

いわゆる、『そういうシチュ設定』の写真なのだろう。こういった『目が覚めたら女の子でした』とか、なんならそれこそ先日の彼がそのまま『女の子になったらこんな感じでした』という妄想にしても十分にオカズになる美人だ。そういったジャンルが好きだからこそその妄想の飛躍なのかも知れない、ナマモノだし良くないよなと思いつつ、気付けばその人のタイムラインを漁っていた。

その時、駅到着のアナウンスが響き、車体の下で軋むブレーキの音が響く。

沸き立つ劣情を振り払い、僕は降り立つ数人と同様に車両のドアをくぐる。

余裕を持って出た筈だが、想定よりは待ち合わせ時間に迫っている時刻だ。少しは急いだ方が無難かもしれないと、待ち合わせの場所までの出口からの遠さと人混みを加味して思う。そう遠くはないが、駅構内はホームだけをみても混み合っている様子だ。外国人観光客もそこそこ居る、急いで悪い事は無いだろう。

そう思案する間にも、駅構内には乗ってきた列車が発車する旨を伝えるアナウンスが響き渡る。不意に見付けてしまった性癖ジャンルの投稿に込み上げてしまった悶々とした衝動は身体の奥で燻っているものの、沸きあがる妄想と情欲を振り切って歩き出す。

オタクの街だけあって駅の中にはそこかしこに2次元美少女のポスターだ。最新のソーシャルゲームの広告、人気の根強い大陸産ゲームのポップアップストアまである中、それらのコスプレ

姿の女子2人がワイワイと人集りの中で歩き回っているのすら見て取れる。さながらちょっとした有名人かの様に、手なんて振ってみたりしている。

それはそれで楽しそう、ちょっと羨ましいなと思わない事も無い。

(まあ、そんな事を思っても仕方がないんだけどね)

一応、待ち合わせ場所と経路の最終確認にスマホを開く。

またタイムラインには別な美少女の写真が性懲りもなく、むしろ性剥き出しで流れてきていた。しっかり内容や発言者を見る暇はなかったが、ひと目見て分かる美人だった。線の細い華奢な少女のネグリジェ姿、アイコンは不思議と見覚えがあるアニメ調のイラストだった気がする。それこそフォロワーに居た気もするが、最近見てないアイコンだったし見間違いや他人の空似かも知れない。あっという間に流れて消えてしまっていたが、その印象はバッチリ頭に焼き付いている。それだけ強烈に不埒な写真だったのは確かだ。

ただでさえ目鼻立ちが整った綺麗系の美人、長い睫毛の切れ長の瞳に艶やかな銀の長髪。股を上げたその写真は明らかに無修正の状態で、おっ広げられた細くも脚線美のある美脚の間で淡い桃色の恥部がある事か惜しげもなく丸見えになっていた。下手すればアカウントが消されるであろうレベルの変態写真、ただでさえ印象に残る小柄な美人が物欲しげにこちらを見詰めている姿は強烈で、一度冷静になった身体にドツと熱が戻って来るのを感じる。

流れて消えてしまっても、その写真の内容はバッチリと脳内に残っている。こちらを凜々しさに似合わぬ蕩けた眼差しとふやけた口元で見詰める姿、長く艶やかに伸びきった銀髪が胸の膨らみどころか、枝垂れて腿にまで掛かっている様が肌とのコントラストを見せ付けて色白ぶりを強調している。ぷっくり膨れた女陰を撫で付ける細指は明らかに、その入口を拡げて淡く綺麗な桜色を見せつけていた。酷く強烈だ。僕は深く息を吐いて平静を保つ。

それこそ、こんな美人同士だったら花もあるんだろうな、と僕達の姿を見てふと思う。

どうせ男同士、ふと擦れ違ったカップルの姿や女子2人を見て、不意に切なくなる。充分に楽しみだった筈なのに、なんというか何かに負けた気がして物悲しい。もしも女の子だったら——直前に見ていた投稿が投稿だったのもあり考えてしまう。例えば僕が、例えば相手が、あるいはどちらもが——そしたら見える世界の鮮やかさだとか、わいわい遊ぶ物の楽しさなんかは変わるだろうか。不意に重くなった足取りを、何考えているだろうなどと自嘲で忘れて歩き出す。期待したり妄想してしまうのは、多分オタクの性なのだ。

分かっている。現実とは現実、フィクションはフィクションなのだと。

だから——。

(そんな訳、ないなんて分かってるんだけどね。分かってるともさ——うん)

内心に1人呟き、僕は待ち合わせ場所へと向かう足取りを早めたのだった。



雑踏やビル壁面の広告が賑わいを添える町並みの中、僕は待ち合わせ場所に到着する。

観光客らしい中国語を話す集団、修学旅行中の男子達と思われる6人ぐらいの制服姿、丁度待ち合わせしていたのだろう全身黒尽くめに黒マスクのちょっと柄側そうな男女カップルが落ち合う姿が見て取れる。友達同士で買い物に着たのだろう、そんな感じの面々も多いがスマホ片手の

様子は実にオタクの街らしい。横持ちでガッツリゲームをしている姿なんかは、余り他の街では見かけない様な気がする。

今回の相手を思い出す。確か今回のオフ会の話が出る間、最後に話していた内容も女体化モノの話をしていた様な気がする。彼がやたらとそういうのが好きで、なんならそういった文章やイラストなんかの依頼まで受けていたのも覚えている。丁度何か頼んでも良いと、そんな事も今回思っていたのを改めて頭の中に浮かべつつ、改めて先程の投稿達を思い出してしまう。きっと彼なら、そういう性別が変わる様な目に遭って、えっちな自分に気付いて酔い痴れたりだとか、逆にそういうえっちな女の子になる様に操られてしまうみたいな話をびっしり数万文字もの長文で書ききってくれるだろう。全く、そんな事を考えているから、さっきみたいな投稿で理性が乱されてしまうに違いない。

もしこの後、彼に先程のSNSでの話でもしてみたら、きっとふしだらなもしもの世界を書き綴ってくれるに違いない。知らない間に皆が女子になっていく世界で、それこそ僕や彼みたいな普通の男子が女の子になってしまう物語。その結果、どんどんと他の子達の様子に乱れる事を覚えて溶けていく、蕩けていく。情けなくてふしだらで、でもきっと快楽に溢れた素敵な瞬間や甘いひとときを彼は描き出してくれるだろう。下手をすればBL沙汰だが、TSシチュなら僕としてはウェルカムだ。僕にしろ、彼にしろ美少女と男、美少女と美少女ならなんだって美味しい筈。でも、強いて言うなら相手がなっているよりは——と思考を捻げたのも束の間、スマートフォンが振動し、見ればメッセージが届いていた。

『着いたよ、今近くに居ると思う！』

依頼にしても良い、そんな妄想を打ち切って周囲を見る。

人集りの中で直感で探すのは難しそうだ。しかし時刻は確かに待ち合わせの時間だ。

彼の人物像を思い出しつつ、僕はぼんやりと周囲の人波を見渡す。

「しかしだね、こんなに人がいると流石に困ってしまいますねえ」

冗談めかした口調でぼやく視界に、見知った姿はない。

都会の喧騒、広場ではあるが行き交う人も多く、雑踏の真っ只中といった風景だ。一際大きく目立つ黒黒としたビルに繋がるスロープの手前、僕は立ち往生している。立ち並ぶビルの隙間へと消えていく人、人、人。流石に土日ともなれば人集りも洒落にならない。人の多さに悪酔いしてもおかしくない中、僕は途方に暮れつつスマホを持ち直した。

振動が1つ続き、画面を覗くとオフ会相手からのメッセージが届いている。

『ね、今どんな服？ 何見える？』

そそくさと返信すると、短く『おっけ』と短い返事がひとつ返ってくる。

続くのは『今行くね』という文言の付いたコミカルなネコが跳躍するスタンプだった。

待っている旨でも伝えようと、文字を打ち込み始めた直後の事——。

とんとん、と不意に背中を小突かれる感覚。

僕が振り返ると、そこには見た事も無い様な、しかし見た事がある気がする美少女が恐る恐るこちらを見上げて、すぐ真後ろから問い掛けて来ている姿があった。

「あの、オフ会ですか？」

ラベンダーを思わせる薄紫のケース入リスマホを片手に、少女は小首を傾げて問い掛けてきていた。不意の事態に僕は思考を停止させてしまう。

明らかに背も低めな小柄な女子、彼女の服はいわゆる地雷系とはいかない位の、フリル付きの白い吊リスカートを主体にした控えめ、かつ雰囲気甘めなロリータファッションに類する服装をしていた。もちろん、可愛い服を可愛いビジュアルの少女が着ていれば、それは間違いなく可愛い訳で、それもあって無性に警戒してしまう。

ビル風になびく靱やかな眩い銀系の長髪、その後頭部に続く上品そうな編み上げに白いリボン。少し目鼻立ちは凜々しげだが、問い掛けてくる様子と不安げな表情が思わぬギャップを感じさせる。睫毛も長く、まるでマンガや物語の世界の中に出てくる美少女だ。それこそ、こんなオタクの街にはちょっと似合わないくらいの華と無垢さを感じさせる。あくまで印象の話なので、彼女が本当に無垢かは知らないが、線の細い身体をシュッと包む清潔感のある服は、多少非現実的なながらも背格好よりは大人びた印象も感じさせる。手首には水色のシュシュとリボン、ハンドバッグはこれまた白が映えるブランド物だがいやらしく見せつけている様な印象はない。それほどに全身が清楚感とも言うべき雰囲気醸す服装をしていた。

首元に巻かれた眩い空色のリボンも相まって、全体的に爽やかな彩り。
正直言えば、気が動転する位には破壊力のある、ちょっと小柄な正当派美人だ。

それこそ、オタクが理想とする清楚系美少女、此処に在りといった感じである。

「もしも〜し？」

ひょこひょこと爪先立ちになって、こちらに手を翳して彼女が言う。

その度にセットするのも大変だろう少女の髪、丁寧な編み込みの下に垂れ下がる銀髪がふわりふわりと揺れ踊る。ひと目見て分かる美少女、この子は可愛いと直感できる。故に僕は、ある恐怖感に苛まれ始めていた。それこそ何かの間違いで、これは待ち合わせトラブルでも装った美人局だとか、美貌で相手を釣るマルチや商売毎への誘いなのではないか？ そんな不安が込み上げてきて、どう反応すべきかさえ迷ってしまう。

こんな子が話しかけてくるなんて、ひょっとしなくても何かがあるに違いない。

「あの〜……」

そう電撃的な思案を巡らせる間にも、その少女は迫ってくる。
トンツと軽い足取りで距離を詰め、ともすれば触れてしまいそうな距離感だ。

そして改めて、少女は小首を傾げつつ、怪訝そうな眼差しで僕に向かって問い詰める。

「……聞こえてますよね？」

やや吊り目気味な大きな瞳、その翡翠色の眼差しがこちらをはっきりと見上げていた。

覗き込むようにこちらを伺う彼女との距離はほぼない。すっきりとした顔立ちは、大人びた印象もありつつ顔つき自体は少女といった方がしっくり来る童顔。見上げた空の色の様な、晴れ間を思わせる鮮やかなスカイブルーを宿した瞳はくりっと丸く、ぱちくり閉じて開いてを繰り返す瞳を縁取る睫毛はボリューム感のあるふわふわの毛並みだった。

化粧っ気はあまり感じられないが、それでも充分に戦闘力を感じさせる。

「あ、ああ……うん」

瞳に吸い込まれそう、というのはこういう事を言うのだろうと実感を持って理解した。見惚れてしまいそうになるが、流石にそれは僕の世間体が危ういので一旦忘れよう。僕は煩惱を断ち切って、その眼前でひょこひょこ存在をアピールする彼女へと向き直る。

その間も詰められる距離、なんだか爽やかな柑橘系の良い香りがする。

「もしもーし？」

「あっ、はい、なんでしょうか」

返答待ちの間に痺れを切らしたのだろう少女は、遠慮なく僕の服の裾を掴んで揺さぶる。

それこそこのままだと、何をされるか心配で溜まった物じゃない。よくよく見れば彼女の履く白いブーツはかなり厚底。身長的にも印象以上に小さいのだから、下手すれば誘拐犯に間違われるかも知れないとさえ怖くなる。下手に痴漢だなんて言われたら最後、きっと社会的に抹殺されてしまうのだろう危機感がある。こんな力も無さそうなか細い乙女と、なんてことないその辺の男子である僕の言葉であればどちらが信憑性を、もしくは指示を得られるかで言えば実に明白だ。仮に僕だって、この少女を助けるべきと思うだろう。

間違いない、だからこそ僕はどう接すべきかで過剰に悩みつつ、返事をする。

「えっと、その……だね、そうなんだけど……」

大げさにこくこく頷いて、ややオーバーリアクションなのが猶パンチ力がある。

「うんうん？ なあにい？」

よくよく見れば、ワクワクといった様子で胸元に寄せた腕には膨らみが食い込む。ほっそりして見えていたから見誤りそうだが、細いなりに『あるものはある』体型。そんな贅沢、そんな点が二物どころか出血大サービスをするなんて、あるだろうか。

僕は、パチパチとショートしそうになる思考の熱を深呼吸で吐き出す。
拭う額からは、思わぬ冷や汗が流れ始めている。

「ふーっ……」

落ち着け、落ち着くんだ。頭の中で繰り返す。冷静になるんだ僕、こんな時こそ。

一旦話を続ける前に、僕は状況を整理する。一体何が起きているんだ、ただ道を聞かれたただけにしては、質問がピンポイント過ぎるのだ。流石に他人と間違っているのだと思いたい。改めて僕は状況を整理し、事実を頭の中で精査していく。僕はネットの男友達とオフ会に来て待ち合わせ最中、その筈が何故か見知らぬ飛び抜けた美少女に話しかけられている——それ自体は、何も事実と相違ないと言える。

僕の状況把握に問題はない、問題は彼女の話はまだ何も聞いていない事だ。

自分でも驚く程に取り乱している事に驚きつつも、僕は恐る恐る尋ねる。

余りに近かった距離が危うく、そのため半歩身を引きながら、そっと慎重な声で。

「ええ、と、どちら様で……？」

その途端、少女の口元がぐすりと笑む。

不意に先程までの精悍さが崩れ、色白だった頬が赤らんで膨れている。ぷっ、と軽く吹き出す音に続けて、彼女は景気よくけらけらと楽しげに、その細く引き締まったお腹を抑え込みながら笑い出す。その仕草は、急に天上人から彼女の印象を引き下ろす。
意外と俗っぽい、なんというかちょっと残念な爆笑度合い。

「くすくすくすっ……あはははっ！」

それでも、薄く開いた瞳、笑って微かに涙目になった視線は必要以上に艶っぽい。

「なにさ、その反応はさあ……ぷぷ、あははっ、面白いね。君」

ふさふさの睫毛で縁取られた、目力の強い空色の瞳を細めて彼女は言う。
鈴でもころころと鳴らす様な高く涼やかな声色は、さながら物語の中でも重要そうなミステリアス系のキャラクターだとか物静かなヒロインにでも似合いそうなアニメ声。それはそれで、笑って見せれば別な魅力を感じさせるし、よくよく見れば周囲の視線も集めている。
大分僕としては居心地が悪い状態だ。

(まさか、な……)

ひとつ思う所はあったが、それは記憶との齟齬もあり信じられない。
この少女こそが待ち合わせ相手だとか、そんな事実は成立しない筈だが自信がなくなってしまうようになる。ひょっとしたらこっちが本当なんじゃないか、そうだったら良いなとさえ思ってしまうがそれはそれで彼に申し訳ないし失礼過ぎる考えな気がする。
だとすれば、奴が仕込んだドッキリだとか、そういう物ではないのだろうか。

あるいは僕が忘れていてだけで、彼女とは実は知り合いで、たまたま向かったこの街で見かけたから『オフ会？』なんて世間話をしに来たんじゃないのか。そう思い込もうとしても、こんな美人な知り合い居たら忘れないだろう事は火を見るより明らかだ。

僕にも女友達だって居るには居るが、彼女は記憶にない。こんな愛嬌と、有無を言わせぬ様な美貌に、多少人を狂わせてもおかしくない魔性の魅惑——覇気、芯の通った感じとでもいうべき堂々たる風格——異様なまでの存在感と言っても差し支えない特徴を持つビジュアルの良さには覚えがない。この、聞く者の注意を引き、ともすれば従わせたり迷わせられるだけの美しくも表情豊かな声色、そして声質には本当に覚えがない。聞いたとしても、それこそテレビアニメの中くらいだ。白髪意味深美少女からしそうな声、そう言えばオタク仲間なら絶対に分かってくれそうな細くも通る澄んだ声。

間違っても、男がいたずらで女装しているだとか、云々かけて完璧に仕上げた女声の真似事だとかで成立する次元ではない。響き然り、高さしかり、どう聞いてもその声はまごうこと無き女性の声に違いなかった。

「ふふっ、くすくすくすくすっ……あはっ」

そんな覚えのない謎の少女はひとしきり笑った後、にんまりと口元を緩めながら茶化す様にして言う。ただでさえ、その凜々しい顔立ちからは想像も付かない、表情豊かな悪戯な微笑みが破壊力抜群だと言うのに、彼女はその両頬に伸ばした両手の人差し指を添えている。自らの頬をツンツンとしながら、自分を差し示す屈託の無いはにかみ笑いがとても眩しい。

してやったりと、したり顔で続ける少女の声はさぞや嬉しいのだろう満面の笑みだ。

「分からないですか？ 分からないかなあ～、そっか～！ 分かんないよねえ」

挑発でさえ可愛い。こんな生き物存在して良いのだろうか。

ご満悦の面持ちを、許されるなら両手で摘んで引っ張り伸ばして遊びたい。無論、いつ強面のガウ悪男やらポリスメンが飛んでくるかも分からないのだからそんな不埒はしない。それに僕は真っ当な男子、そんな失礼な事を見知らぬ相手にする様な事も無い。

そう、幾らからかわれて、どれだけ周囲でキャッキヤとはしゃがれようと。

「ま、まあ……」

流石にずっと小刻みに眼の前で身体をフリフリされたら、ちょっと生意気には思うが。
とはいえ、やはり無縁な美女に絡まれるのは怖い。その原則を思い出し耐える。

程無くして、痺れを切らしたのであろう少女が言う。

「私だよ、わ・た・し！」

数歩歩いて距離を取りつつ、その少女が振り返る。

ひねる身体に、顔に添えるのは随分と個性的な三本指のピースサイン。臆気ながらに既視感のあるそのポーズを暫し眺めた後、呆然としていた僕の頭の中に電流が走る。見た、確かに見た事のあるその仕草に僕は急いで開いたスマートフォンの中、フォローしているアカウントの中に埋もれていた1つのアカウントを発見する。

そのアカウントのプロフ欄、そこに既視感の正体が存在した。

確かに、彼女と同じポーズをした美少女のイラスト、そのアイコンが。

「え……？」

僕は愕然とする。

そこには確かに、彼女と同じポーズの女の子が描かれていた。癖の強いポーズ。そうそう他では見ないだろうその仕草、そしてアングルまで完全一致の再現。そのアカウント名を見れば、直前までやり取りしていたチャットアプリの相手とまるで同じハンドルネームが光っている。彼女こそ、この事実さえ見れば今日この日、この場でオフ会の待ち合わせをしていた相手、『りのりす』さんその人だと言う事になってしまう。信じられないが、通話アプリ内アイコンと完全一致の彼女の仕草、それ自体は揺るぎない事実だった。

「どう？ 分かった？」

分かったが、分からない。理解できない。

以前あった彼は、姿の記憶こそ臆気だが確かに男だった気がする。それが不安になる程に彼女はれっきとした少女だった。どうみても女装や性転換なんてチャチなものじゃない、それは有り得ないだろうと僕の中の常識が訴えて来る。

その上、彼女の見た目から受ける年齢のイメージは十代半ばかそれ未満。つまり連日連夜盛り上がった懐かしのアニメやらゲーム、同人作品なんかに関する話題の内容を知っているにしては随分とあどけない。その把握量や知識から推察していた年齢よりも、優に10歳から15歳、下手すれば20歳は若返っていても可笑しくはないだろう。それほどに、ありとあらゆる辻褄が合わなくなってしまうのだ。第一、この見た目でチンチンが付いている訳もない——むしろ付いていたらどうしようと狂喜乱舞しそうになるのだが——すっきりとした細くも括れた腰を包むタイトめなラインのロングスカートに、そんな不審な膨らみもまるで無い。やっぱり彼女は、実は本当に僕の待ち合わせ相手なのではないか？

信じられなかったその予感が、彼女が続けて呟く言葉ががっちりと補強してしまう。

「ね——『ありさか』さん？ ふふ、くすすっ♪」

無邪気な笑みで、彼女は僕の名前を呼んで見せた。
街行く人は誰も知らないだろう、僕のネットでのハンドルネームを。

改めて怪しい人影、それこそ待ち合わせの張本人が物陰からこちらを見ているのではないかと周囲を確認する。こんな事がある訳が無い。きっと何かのドッキリだとか、それこそ手の込んだ悪戯に違いない。そうであってくれとは思いつつ、しかしこれが本当なら——特に彼女とどうだという訳でもないのに、そんなやましい考えさえ浮かんでしまう。

しかし周囲を見渡したとて、人影はない。
こんな女の子を何処で捕まえたのかは知らないが、彼の行方も知らないはまだ。

そんな僕にいい加減気付いてよと言わんばかりに、彼女が歩み寄ってくる。

「貴方の事だよ、あ・な・た」

言葉に合わせ、スキップの要領で詰め寄ってきた彼女に鼻先をこづかれてしまう。
ハッとした僕の瞳には、清楚な服装に似合わぬ蛍光緑のネイルをした爪先が見える。
独特なセンスだが、不思議と目を引く色彩に思えた。

続けて僕の頬をつんつんと、その指先でこづいてくる彼女。

頭の中に浮かぶその正体、彼女が誰かという答えを僕の記憶が全力で否定している。目の前で揺れるスカートや長髪、そして香る爽やかでフレッシュな匂いとは裏腹に強烈に香り始めるミルキーな甘い芳香。ふとした拍子に嗅いだら最後、ともすれば脳の奥底までスーッと深く深く浸透するまま、どろりと甘さを煙らせて思考力を奪い去ってしまいそうな濃厚な香り。彼女が漂わせる香水なのか、あるいはこれが体臭なのかは分からないが、これまで嗅いだ事も無いような良い匂いにぐらぐらとしてしまう。

そして意識が揺さぶられる度、やはりこれは何かの罠やドッキリなんじゃ無いかという思考が強まって、同時に相反する感情としてこれを真実として受け入れたい。彼女を本当に、例のオフ会相手の正体なのだと信じたくなってしまう。

だから僕は、恐る恐る問いかけた。

「まさか、本当にりのりさんですか？」

それこそ『会う約束をした男友達が女の子になっていた』なんて、そんなのフィクションの世界の話だと思っていた。現実の世界で、こんな変身ができる訳ないと内心で全否定しつつ、笑うなら笑うでひと思いに笑ってくれればいいと、僕は意を決して問い掛けた。

しかし、彼女は首を縦に振るばかり。大げさに、こくこくと。
そして一際にこやかな笑みで、キャピッとあざとい仕草からの3本指ピース。

「あはっ。そうだよ～、私がりのりすう～☆」

本当にネットでのアイコン通りの仕草をする彼女は、やはりどう見ても女子だった。
彼女はそのまま、両腕を上げてくるりと回ってみせる。
布地の膨らみこそ少ないタイトなスカートだが、微かに風を孕んで膨らんだ。

服装までしっかりと、どう見たって女子なのだ。
彼女はそのままピタリと止まって、またニタッと微笑みながら語り出す。

「別にりのさんとか、りりすさんとか～好きに呼んでね～？
あ、そうそう。別に赤の他人って訳でもないし、いっそ呼び捨てでも良いよ？
ねー♥ いっぱいオカズやおちんちんのハ・ナ・シ、したもんね～♥」

喋りながら細い人差し指を踊らせる様に揺らしている。
流石にそんな話まで持ち出されるなら信じるしかないのだが、だとしたら僕がかつて会った彼は
一体何だったのだろうか？ 流石に気になって、問い掛けてしまう。

「え、じゃあ僕が会った男の人の人は……？」

問い掛けると、赤羅様にとぼける様子で小首を傾げながら唇に指を添えている。
外見の割に随分とぶりっ子というか、お茶目な喋り方をしている。

「えー？ 何の事お？ 他の人の事と勘違いしてるんじゃない～い？」

他の人ならまだしも、僕はちゃんと覚えている。流石に怪しいので追求してみる。

「いや、確か半年くらい前に――」

「あはは、うんうん、分かってるって～！！ ふふ、ドッキリだよ～！
仕込みも長い分さ、びっくりしたでしょ～！ えへへ～！」

露骨な早口、大分無理筋の言い訳だが、特にその怪しさを追求する方法は思いつかない。
本当にドッキリだとしてもこんな言い方をされたら不信感しかない。
更に追求しようとした所で、彼女は強引に距離を詰めてこちらへと飛びつくようにして。

「あ、あの！？ りのりすさん！？」

「ん～？ なに？ 本当に赤の他人ならこんな事しないでしょ～♥」

思いっきり胸が当たっている、やっぱり服装の印象よりは全然ある。
なんなら赤の他人どころか友達だってまずしない恋人の距離だ。
余りに突然の事に戸惑っている間にも抱き着いたまま胸元に顔を埋めてくる。

（やっぱりそれは距離感おかしいって！）

事実確認する以前の問題の発生に、僕はどうしようもなく振り回されるしかない。
誤魔化すように詰められた距離感、彼女の強引な振る舞いに心の距離は初対面かそれ以上に
ぐぐーんと遠く開いた気もするのだが、だからといってその疑いを露わにする余裕はまるで無かつ
た。彼女は有無を言わず、僕に抱き着いたまま頼ずりまでしてくる。

「あ、あの！？ りのりすさん！？」

異様に距離が近く、そして躊躇も節操がない彼女の振る舞いに困惑してしまう。一体どうしてこんな事が出来るのか、まるで理解が追いつかないまま挙動不審になってしまう。咄嗟の余り、彼女を拒むにも拒みきれず、引き剥がす事もままならない。どう考えても彼女の距離感や振る舞いは異様に近く、とはいえそのか細い身体を全力で突き飛ばすのも周囲の目や彼女の安全を思うとよろしくない。

僕がされるがままになっている間、酷く甘えた声でりのりすさんは寄り付いて。

「だーかーらあ、りので良いってばあ♥ ね？」

こちらを胸の内から見上げてくる。息さえ掛かりそうな距離の中、先程も感じた甘い香りが僕の意識をふわっと溶かしていく。そのままスリスリと身体を寄せて、ただ抱き着くどころかびったりと密着してくる。その身体の起伏が、僕の身体に押し付けられるがままに形を歪めている。それどころか、真っ白なワンピースからはほんのりと下着の色、眩い空色がほんのりと透けているのが見えてしまう。

(あ、当たってる！！ てか、ちゃんと下着も着けてる！？

い、いや当然なんだけど……そ、そんなっ！？ ほ、本当に……女！？)

万が一にも女装で胸が偽物なんて事も考えたが、その予想は裏切られる。

彼女は自ら胸を擦り付けるようにしながらも、目を細めて『あは、くすぐったあい♥』なんて笑っている。淡い桜色の唇から覗くのは、唇に少し引っ掛かる様な八重歯。不意に距離を詰めたりと、小悪魔というには随分と積極的だが、その男を振り回す様な悪戯な態度によく似合う。そして、不意に視線が交錯するその瞳を見ていると、その深い空色の中に意識が吸い込まれていきそうな錯覚を覚える。胸が、不意に沸き立つ高揚感に早鐘を打つ。

「ね、行こ？ りのお腹空いちゃった、早く行こうよ♥」

啞然とする僕、ゼロ距離のままから彼女はくると右隣に回り込む。

その間も、つい僕の視線は彼女の瞳を追いかけてしまっていた。

「ほら、行こ♥」

まるで彼氏彼女同士でもする様に、彼女は僕の右腕に抱きつく様にして引っ張り始める。

何の惜しげも恥ずかしげもなく、彼女はさも当然の様にそんな振る舞いをしてみせる。僕が女子だとしても絶対に有り得ない様な距離感だった。それこそ恋人でもない限り、こんな振る舞いをするなんて――。

(ありえない、だろっ！)

それこそ、誘っているという奴だ。そうとしか思えない。

僕はそんな色香に屈するつもりはない、しかしここで事を荒立てるのは得策ではない。

「なにあれ？ どういうカンケー？ 見せ付けちゃってマジムカつく」

ただでさえ彼女は目立つ容姿をしている。その上での大胆な行動は殊更に人目を引く。

年端もいかない少女に見える相手との距離感ではない、端から見ると事件の香りが凄い。

ちら、とこちらに視線を向け、りのりすさんは僕に言う。

「ほら、積もる話は後で、二人っきりで——ね♥」

その瞳が薄ぼんやりと、空色の中に眩い蛍光色の淀みを揺らした気がする。

彼女は依然と距離感が近い。どう見ても友人関係の距離ではない彼女の距離、しがみついたまま甘える様な声で身体を寄せ続けてくる。触れ合いそうどころか、腕にはしっかりと彼女の胸の双房が包み込むように充てがわれている。薄い身体、着ている服の印象以上にしっかりと女性的な身体、彼女はそれを容姿から受ける清楚さとは真逆の振る舞いで押し付けてくる。布の擦れる感覚の中、薄布の更に奥にある硬い布地がたわむ感触。

より強く押し付けられる乳房の先、突起の感覚さえる中、彼女の下着の金具の音だろうか金属音が微かに耳に聞こえてくる。ぐぐっと押し付けられたままの突起が、僕が狼狽えている間にも布越しに一段階、その膨らみを際立たせる様に膨れて肌に食い込んでくる。

彼女は何もその点には触れず、僕の腕をグイグイと引きながら平然と話し続ける。

「ふふっ、私は誰でしょう～？　なんて流石に変だよな。

よくSNSでも流れてくる、即売会でサークル主に向かってさ、『私の事分かりますか』～ってする奴。それこそ大手の所なんて、関わる人も多いんだしさ、どうせ1人1人なんて覚えてないし分かる訳無いのにね～！　あはは♥」

ひとりでに話して笑ったまま、彼女は僕を引っ張っていく。

状況も立場も全てが不利、僕にとっては劣勢だった。

「さ、ご飯食べて～♥　い～っぱい栄養つけて、御飯御飯♥　カラオケ行こ？　ね～♥」

状況へのツッコミどころが多すぎて、その口振りの違和感を見逃してしまう。ふわふわと浮ついた口調でほくそ笑む彼女、その瞳に揺らめく奇異な色彩の揺らめきがぐるりと瞳の中を泳ぐように揺れた気がする。渦巻いていく様に伸びていく模様を見ていると、本当に意識をどこか遠くに、その渦を通じて吸い込まれていく気さえしてする。

疑問さえ忘れてしまえば、こんなに素晴らしい時間は無いだろう。目を見張る程の美少女が僕の手を引き2人だけの場所へと誘おうとしている。本当に問題なければ、こんなにうれしい話もなかなかないだろう。今は素直に喜べないが、悪い時間ではない事は確かだ。ひょっとしたら、彼女が単純に独特な距離感や貞操観念を持っているのかも知れない。そういった次元の話ではない気もするが、そう思った方が楽なのでは？　と、ついそんな風に考えてしまう。その考えに囚われきる事こそ無かったが、思考がまとまらぬ間にぐいぐいと引っ張られてしまう。

「あは♥　緊張してる？　そんな気を使わなくっても良いのに～！　もう♥」

笑う口元に八重歯が覗く。その覗いた歯の根本には奇妙な事に白から薄黄緑色へと変わっていく奇妙なグラデーションが見て取れる。歯に付ける宝石飾りがあるにはあるというのは昔、何かしらで見た様な気がするが、オシャレにしては随分と奇妙だった。

しかし、くすりと笑むその口元からも仄かに甘い匂いが漂ってくる。

怪しい光を湛えた視線が僕目と交わる。同時に薫る香りが不意に意識をさらっていく。

どうやったって拭いきれない筈だった得体の知れない気味悪さ、それが途端にふわりと、ぐるりと巻き取られる様に消えてしまいそうになる。その途端に改めて自覚するのは、この不安さえなければ眼福でしかない眼前の景色への高揚感、そして彼女の行いに対する期待感。急にぼやけていく猜疑心、これは最早デートなのでは？　浮ついた思いが急に沸騰する様に湧き上がっていく、身体も自然と反応してズボンの中が張っていく感覚がある。

リリすさんは、そんな僕の股の膨らみをそっと撫でて囁いてくる。

その指先は、つついてくすぐる様に突起を弄んで、起伏を下から撫で上げる様にして。

「でもさ、ガチガチの君も可愛いねえ……くす♡」

一際強く身体の起伏を押し付けられる。事故や偶然ではない、改めて故意に。
くぐもった息が、背伸びした彼女の口先から僕の耳元をねっとりとかすぐる。

「そ・れ・こ・そお——どろりと溶かして、全部ごっくん、食べちゃいたいくらい♡
あは♡ なんだかもう、我慢できなくなっちゃったかも♡ ふふ♡
だから、ね……？ ちょっと味見させてね♡ なぁんて……お耳にふ～っ♡」

その瞬間、一瞬意識が飛んでしまいそうになる。逸る欲望に滴る雫に濡れた股間、それも気にせず彼女は僕の股間をむにむにと揉んでくる。僕の理性や感情を置き去りにして広がっていくその染み、じつりとズボンにまで滲むその湿り気が徐々に膨れていくのさえお構い無しで彼女はより深く指の腹を竿の起伏を探り、その形に這わせる様にしながら。

「細かい事なんて忘れちゃおうよ、ほら、可愛い蕩け顔を見せて欲しいなって……♡
ほら、とろ～り、とろお～り……♡ そうそう、良い顔してる♡ ほら、ここなら——」

気が付けば僕は、高架下の暗がりに入れ込まれていた。
そして彼女は改めて正面へと、僕を壁側に追い詰める様にして身体を這わせてくる。
僕の濡れた股下を握ねるまま、じつりと濡れそぼった細い中指を咥えて、ねぶる。

「ちゅふ……♡ あは♡ 美味し……♡
そうそう、変に抵抗しないでよ？ それとも一回、出しちゃおっか……♡
頭の中の余計なもの、今から、びゅ、びゅ～っ♡ って、しちゃおうね？ んふ♡」

高架を支える柱の溝に押し込まれたまま、気が付けば抵抗も出来ずに従っていた。
物陰の中、屈み込んだ彼女は徐ろに僕のズボン、そのチャックへと手を伸ばす。
パンツのスリットから躊躇もなく、僕の男根を取り出して彼女は笑う。

そのふやける様に蕩けた口元から、嗜虐心を丸出しにする様に八重歯が剥き出しになる。
彼女がズボンから引きずり出した僕の男根を眼の前に拵げる口、その中から覗いている喉元には見た事も無いような無数の肉襞——とても人間の喉にあるとは思えない、それこそ直球な例えにはなるがオナホールなどでしか見た事が無いような異形の内部構造——人間離れしたぐちゅりと蠢くままに蛍色の粘液を煌々と滴らせている。

「あははっ♡ 美味しそう美味しそう美味しそうっ♡
んん～っ、ちゅっ♡ んちゅる、んむっ、んくっ、んぐ、ずずずっ♡ えへ♡」

彼女が男根を嚙り上げようとするのを、僕はまるで拒む事が出来なかった。
そのまま快楽で腰がガクガクと震える中、僕は——。

「んふ♡ ちゃんと嚙って、抜き取ってあげるからねえ♡」

怪しく輝くマーブル模様の瞳がじつりと僕の方を見詰める。
自然と熱に浮かされる様に頭が呆然として、脳内でチカチカと火花が散る様な感覚。
不思議と声を出すのもままならず、息ごと喉が奥の方に引っ込んだみたいに動かない。

「っ……あ……」

喉奥まで咥えこまれて、うねる温度に包まれる生々しい肉感を男根に感じる。

ねっとりとした湿り気と、そぞろめく舌の襞や喉奥に擦れる細やかな感覚。

彼女の口の中に満ちる呼気の温度、唾液の温度が伝わってくる中、男根はどこまでも張り詰めながら怒張を強めていく。その度にドクン、ドクンと心臓が強く疼いて、合わせてヒクヒクと震える竿の先端が彼女の奥に進んで、魔羅ごと大きく膨れていくのを感じていく。むずむずと臍下が疼くま、腹の奥底に鈍痛の様な感覚が強まっていく。段々と増していくその激しさが増すに連れて、ただ呆然とするだけだった意識に痛みが直接繋がってくる様な奇妙な感覚に囚われる。苦しさ、痛みに近い感覚が僅かに、その後に続く熱烈な口淫の中に膨れて一緒にたくなっていく。

吐息を漏らすのも、息を整えるのもままならない。

「んちゅ……っんんう♡ ずぞ♡ ぞぞず、ぞぞっ、じゅふる、っちゅ……くちゅ♡」

嬉々として、さながら溶ける寸前のアイスバーをいち早く食べきろうとでもするかのように彼女は僕の男根を深々と咥えて、その根本の毛やら僕という男相手である事すらも気にならないといった様子でニマニマと瞳を細めてフェラチオを続ける。

本当にこんな事を、それも突然に町中でされているというのに僕は嫌に冷静で——いや、なんというか何かをしなければいけないという気持ち自体がまるで嘘の様になくなってしまって、心の抵抗もそうだし、現実感だとか、そういった本来慌てる理由だったものがどうでも良くなっている様——突然、睾丸の裏側をグイッと裏に押し込まれ、僕は意識を手放しながら一際強い吐精をしてしまう。

「んおっ……っ」

堪能する様に鼻を鳴らしてから彼女はそれを喉で受け止める。

口を開けて、広げた中に飛び込んでくる白濁を受け止めた後、まるでご飯やガムでも咀嚼するみたいに丁寧にそれを嚙んで味わうかのように堪能している。

「んんんん～っ……♡ ふふ、にちゅにちゅ、くちゅ、ずぞっ……♡」

覗く口内は真っ白で、鼻先にも少しだけ飛んだ雫が付いている。その雫を目掛けて彼女の舌がずるりと伸びて、長くうねる先端が器用に舐め取った。異様にも思える光景な筈なのに、僕は何も思えないどころか、その気持ちや意識自体が遠のいていく。快楽が膨れていく中、彼女に導かれるままに僕は何度も射精して、その度に僕の意識は薄められ現実から遠く遠く引き剥がされていくかのように希薄になっていった。

もう何度目の射精だろうか、精液というよりは透明な汁だけが僅かに垂れる。

彼女は僕の男根を改めて咥えて、その全体を長い舌でずるりとひとなめにしてしまう。

一滴残らず、まるで何もなかったかのように乾いた股間にズボンを履かせ、彼女は笑う。

「こんなものか、な——♡ ちゅる、んっ♡」

口端に引っかかり垂れ下がる様な一滴を舐め取り、彼女はくすりと笑う。

僕のズボンのジッパーを引き上げ、彼女はそのまま僕の顔を撫でて手を引いた。

くいくいと、意識が漫然としない僕の袖を引っ張り、彼女にこやかに囁いた。

「ほら、行こ……♡ くす♡ 待ちきれなくてさ、お腹と背中がくつついちゃう前に♡」

僕は何も言えないまま、その言葉に従ってしまう。
一度湧きかけていた疑問の事は、何故かすっかりと意識の中心から消えてしまっていた。

「ほら、早くご飯行こ♥ 私も我慢できないや♥ ちゃんにご飯食べて栄養つけてね♥
どうせなら、一口より一杯ある方が美味しくて嬉しいもんね……ふふ♥」

怪しげなマーブル模様の揺らめきを称えた彼女の瞳、その違和感も何処へやら。
ただ漠然と、何かあった様な気がするが思い出せない。

ただ、スカスカになった記憶の空白に彼女の提案やその言葉がするりと入り込んでくる。ほのかに残る記憶のささくれは、彼女に手を引かれるままに気にならなくなってしまった。僕は、何をしていたんだろうか、何故此处にいるんだろうか——ああ、オフ会だった。そう記憶が繋がるまでの間も夢見心地で、その頃にはすっかり人気の多い通りにまで彼女と僕は進んでいた。問い詰める間もなく彼女は進んでいく。その華奢な見た目とは裏腹に、ぐいぐいと僕を難なく苦も無く引っ張っていく。

そんな様子にも不自然な気持ちは僅かにあるが、それだけだ。
言葉になる程でも、確かな疑問や疑念になる程でもない小さな違和感の芽生えかけ。
それまでに抱いていた不信や不可解は、全て跡形もなく嘘の様になくなっていた。

「んふっ……♥」

ちゅるりと口内の残滓を弄ぶ様にして、彼女はいたずらに舌を出した小悪魔顔を見せる。
そんな彼女のしたり顔、なにかに満足した様なご満悦の面持ちの理由には気付けない。

僕はただ、彼女に促されるまま、その細い手に引かれて次の目的へと向かった。



「ほら、此处だよね？ 入ろ入ろっ」

僕達が辿り着いたのは、量の多さと味の良さで話題のガヤガヤとした定食屋。

こんな子が来るならもっとオシャレな店でも良かったのでは、と思いたくなる。

以前話していた限りだと、確かよく食べる方の相手だった気がするという印象から選んだ店なのだが失敗かもしれない。前評判通り、量が多いという売りが刺さっているのだろう、店内は男性客ばかりだった。

「へえー、大盛り無料なんて気前いいね～」

見渡す彼女を、数人の男達がドギマギしながら見つめていた。やはり、いかにも大衆食堂といった雰囲気この場の雰囲気からは浮く様なビジュアルをしている。少なくとも男女で着ている人間どころか、女性客さえ席には見て取れず、明確に場違いな印象が勝つ。

それでも彼女は悠然と振る舞い、案内されるまま席に着いた。ハンドバッグを膝に乗せ、如何にも女子らしい仕草でちょこんと座っている。こちらを見て柔らかな笑みを浮かべつつ、彼女は頬を赤らめながら恐る恐る白状する様に口にした。

「私お腹ペコペコだからさあ、凄い食べるけど気にしないでね？」

多少食べるくらいなら良くある事だろうと頷いたが、彼女の注文した量は想像以上だ。

眼の前に並ぶのは大盛りと呼ぶ事さえ躊躇しそうな小山の様なご飯の山。定食のトレーの数自体がまず違う上、乗っているカツやらフライの量も尋常じゃない。フードファイトでも始まるか、家族連れの中でも良く食べる男兄弟数人が食事に來たのではと思うほどの大盛りの山。見ただけで胃もたれしそうなメニューが所狭しと、通された4人席のテーブルが窮屈に思えそうなくらいに並んでいる。

流石に啞然としてしまう。あまりの存在感と胃もたれしそうな光景に箸も進まなくなる。

「ほ、本当に食べるの？」

両手を合わせて『頂きます』と言った後、彼女は意気揚々と食べ始める。

漫画雑誌の様に分厚い肉厚の豚カツを平然と口に運びながら、彼女はにっこりと答える。

「うん、私育ち盛りみたいなものだから♥」

自信満々に豪語するが、どう見ても心配は拭いきれない。お会計金額もそうだが、それ以前に口も小さければ体格だって細い、どう見ても体格に対して入らないのではと思う量だ。あからさまに多過ぎる。例えばテレビに出てくる大食い選手なんかギリギリ完食出来るだろうといった分量で、ちょっと豪勢だとかそういったカワイイ次元ではない。無理かどうかで言えば、完食可能な人間も居そうだがそれこそテレビ沙汰だろうと思う。小柄な大食いギャルで話題になった人でも、もう少し彼女より体格は大きい。

やはり、傍目に見て無茶無謀にしか思えない。

しかし彼女は物怖じもせず、パクパクと口に箸で挟んでは味付けの濃い生姜焼きやら、香しい中華油でキラキラ輝いている回鍋肉やら青椒肉絲を次から次へと口に運んでいく。

「ん、はふ、あつつ、ん……美味し〜♥」

両頬に手を当てて、それこそテレビタレントの様にわざとらしい位のリアクション。

まあ味は悪くないかなという塩梅だが、どうやら彼女の口には合ったようだ。例え店の雰囲気は合わなくとも、料理が口に合うのなら一安心といった所だろう。箸でひょいひょいと摘まれるままに量が減っていく料理は、それでもまだ多く思える。

見ただけで腹が膨れる料理の山から目を逸らす様にお冷を煽ってから、僕も微笑む。

「それなら良かった」

けど、やっぱり大丈夫？ と問いかけるより早く、彼女はトレー1つ分を空にしていた。

流石に容姿相応に食べ方はキレイだ。箸を運ぶペースが速く、次から次に口に運んでいくといった形で迷いがない。制限時間もない会食だが、頼んだ分を食べきるまでのペースは僕と大差が内容に思える。不思議なものだが、彼女はまるで苦しそうな様子はない。汗を浮かべるでも、お腹を擦るでもなくぺろりと平らげていく。

箸が迷う時間、休む時間が短いのだろう。早送りで食べ続けている様を見ている気分だ。

「あふ、あつつい、けど、ん〜堪んないかも！

味噌の濃い味、頭の中幸せ〜♥ あはあ♥ やばい、意識飛びそおだよ♥」

グルメリポーターでも口にしない個性的な感想だった。

綻んだ口元、緩んだ頬に蕩けた眼差し。確かにこういうオーバーリアクションなグルメ漫画も世にはあるけれど、現実でこんなに色めかしい顔で食事をする人間を見た事はない。そんなに美味しいだろうか、遭難した後に食べたらこのくらいだろうか、それくらいのリアクションだと言っても良い。流石に僕は心配になって、声をかける。

「だ、大丈夫……？」

彼女はひく、ひくと小刻みに震えながら、少しだけ箸を止めて呆けている。

それまでの心配事である食べる量とかお会計とはまた、別な意味で不安になる有り様。正直に言ってしまうと、ご飯を食べて達した様なリアクションを彼女はしている。漫画の中ならまだしも此処は現実だ、まるで機械がフリーズした様に動かなくなって、口元からは熱の籠もった息を吐き出している。

がやがやと賑わっている店内とはいえ、少々周囲の目が心配になってしまう。たまたら周囲を見渡した。目の合ったサラリーマンやら他の客が彼女を見つめていたが、僕の視線に気付くと誤魔化すように自身の丼をかつこんだり、各々の食事に戻っていく。

一方、事を中心である彼女はといえばペロペロに酔った後の様な赤ら顔でふわりと笑み、

「らいじょうぶらよお♥ こんなに濃いもの食べたの久々でえ、はしゃいでるだ一け♥ えへへ♥」

などと、大丈夫だからと右手の箸を置いて、手をぶんぶん振りながら答えるばかりだ。

分からない、どんな食事を食べればそんなリアクションになるのだろう。少なくとも一般の定食屋でお目にかかる様な様相ではない。まるで理解が及ばないが、大丈夫というのならこの場はその言葉を尊重するしかないだろう。変に問い詰めたりして気まずくなるだとか、彼女の機嫌を損ねるのも折角の機会を不意にしかねないだろう。僕はそう判断した。

どうしても彼女の様子が気になるため、ちらちらと彼女の様子を伺いつつも箸を進める。

彼女の食事のペースは順調そのもので、僕が食べ切る頃には全部食べきっていきそう。

それもあって、一旦食べる方に意識を向けつつ、僕は気が散るなりに食事に集中した。

「は一、幸せ♥ この身体最高〜♥」

「え、なんて？」

僕が最後の一口に手を付けようとした頃、彼女が不意に呟く声がした。

聞き取れなかったが、彼女は最後の1杯、わざと残したのだろうお味噌汁、その最後の一口をとりと細い喉を鳴らして飲み干した所だった。微睡み浸る様に細めた瞳、まつ毛同士が絡まってしまいそうな程に接近している。うっとりとした様子で彼女は答えた。

「なんでもないよ、お味噌汁最高ってだ一け♥」

えへへ、なんて笑う彼女の前には、信じられない量の器が全部空になっている。

僕が口元を備え付けの紙ナフキンで拭いた後、彼女は立ち上がって言った。

「特に長居する予定も無いよね？ 行こっか♥」

会計しようと財布を取り出した所で、彼女が周囲を見渡す。

周囲は多過ぎる食事が運ばれてきた時と食事中位まではこちらに注目していたが、食べ終わる頃には各々がそれぞれの食事や雑談に勤しんでいる。それでも何人かは興味が捨てきれない様で、こちらを見ている中で彼女と目線があったようだ。にっこりと口元を歪めて彼女は男性観光客らしき人間を見詰める。

同じ様にこの街に遊びに来たのであろう友人と会話の最中、たまたま彼女と目があったのは一般的な成人男性、真面目そうな男だった。連れなのだろう、ちょっとヤンキー風の同年代の男との会話に花を咲かせていた彼はそのまま硬直する。

そして、視線を交錯させたまま数秒後、彼女の口元がにやりと悪戯に笑むと同時に――男は心此処にあらずといった様子で、ふと何かを思いついたかの様に立ち上がる。会話相手の男の怪訝な眼差しに言葉を返すでもなく、手に持っていた箸を盆の上に落としつつも彼はゆらり、ゆらりと不安定な足取りにこちら側に歩み寄ってくる。会話相手の『おい、どうしたんだよ？ おい！』という声にも答える様子はない。

音を立てて箸が転がる中、その男性が僕と彼女の前、会計レジとの間に割り込む様にして財布を開きながらやって来た。そして、どこか抑揚の薄い無感情な声で、呆然としたままの様子で信じられない言葉を口にする。

「おねエさん、おカイケイ、ダ、させてクダサイ」

きゃー、なんて喜ぶ声をあげて彼女は男性に抱きついて見せる。軽薄だ。

状況だけなら、気前の良いナンパ男の手口としてなくはないだろうが、何かおかしい。

絶世の美少女相手、僕なら戸惑うだろう至近距離でも無感情なのだ。特に微笑みを返す訳でも、恥ずかしげに照れるでも無いし、かといったナンパ成功とニヤつく様子も無い。心此処にあらずといった様な、どこか機械的な振る舞いだ。

彼ははいそいそと万札2枚をレジのトレイに並べる。

「ええ～良いんですかあ～？♥ お兄さんカッコいい～♥」

満更でもない様子で笑いながら、りのりすさんに胸を小突かれるも男は無反応。

先程まで僕がされていた様に、抱きつくままに両胸を押し当てられるがどこ吹く風。

「は？ お前いきなり何してんだよ、色気づいたってチャンスねーぞ！？」

同卓の柄の悪そうな友人の声にも彼は答えない。

そそくさと彼は店員にお金を渡し、自分の席に戻っていった。

ヤジを飛ばしていた彼の友人にも、りのりすさんはニッコリと笑みを投げかける。

「今度、”お礼”……させて下さいねえ♥ お兄さん達♥」

視線が合ったヤンキー風の男が、時でも止まったかの様に硬直した。

続けてもう一言二言言おうとしていたのだろう、なんなら友人を止めようと立ちかけたまま、口をぽかんと開きかけ腰を椅子から浮かせかけたまま2秒ほどしばし固まる。短い間だが、確かにぎこちない不可思議な間があった。

彼は彼で、スッと何事も無かったかの様に着席し、席に戻る友人を呆然と迎える。

突然の事だった。

ふたりとも、まるで何かに取り憑かれたかの様に様子がおかしくなる。原因も理由も分からないが、何故かりのりすさんと視線を合わせた後から様子がおかしい。

そんな彼女は満足気にルンルンで鼻歌を歌う。見知ったアニメの曲だ。

流石に店員さんも違和感を抱いたのだろう、そのお金を受け取るか悩みながら、男達と僕との間に視線を二度三度往復させてくる。とはいえ僕も事情を知っている訳でもなく、苦い笑みを浮かべて誤魔化すしか出来ない。僕も店員さん同様、状況に振り回されている側だ。払われてしまったものは仕方がないし、流石に彼女の食べた恐ろしい食事量相応の金額をぽんと出せる程に裕福でもない。気まずい目線をどう捌こうかと悩む間にも、支払いを建て替え席に着いた男性は感情の薄い声で僕達に言った。

不自然さを感じる平坦すぎる声のトーンのまま、早口で彼は言う。

「イインでス、タベッぷりガ、キモチヨカッタノデ」

不気味だった。そういう喋り方をする人間も居るかも知れないが、奇っ怪だ。

そんな彼に戸惑っている間にもりのりすさんは、『きゃ〜！ 有難うございますう♥』などと声をあげ、パタパタと彼らの席に歩み寄って青年の顔を覗き込む様にお辞儀をしている。彼の手を取り、その視線の先に回り込む様に視線を合わせる。無言の間が不気味だ。彼が黙っている間、正面に座るヤンキー風の男も同じ様に黙っている。雑談に花を咲かせ、店の賑わいに貢献していたのが嘘の様に押し黙り、手も止めている。それが不気味で不気味で仕方がなかった。そして彼女が満足したのか離れる頃、男はまた口にする。

「アあ……気にしないで下さい、趣味のパチンコで勝ったのと凄いものが見れたので。

お嬢さんを前に張り切って、少し格好つけちゃいました、あはは」

自然な声。先程までの無感情さが嘘の様に彼は笑み、頭を掻きながら笑う。

正面の席のヤンキーは未だに黙りつつ、箸をゆっくりと持って食事に戻ろうとはしているが指先が覚束無いのか箸は進んでいない。瞳にも意思の光が薄い気がする。そんな彼を心配するでもなく、男はこちらを向いてにこにこ微笑んでいる。

店員さんも店員さんでまだ困惑しているが、僕達の方を見ては視線を逸らした。

多分、僕と同じ様な恐怖を感じているのだろう、特にそれ以上追求する様子も無かった。

りのりすさんは何を言うでもなく、さも当然の様にまだ僕の腕を取り、引っ張る。

相変わらず胸を擦り付ける様にして、『ほら、行こ♥』なんて笑い掛けてくる。

柄の悪い友人の様子だけがまだ不自然なまま。

だが、支払いを名乗り出た男は愛嬌のある笑みを浮かべたまま、ニッコリと続ける。

「良いんですよ。幸せのお裾分けです。ほら、カップルさんなんて最近少ないですから」

数秒前の様子とは大違い、しかし僕も店員も、違和感はあるけど何も言えなかった。

僕達は思わぬご馳走に預かる形で、万単位の会計を終えて店を出る事にした。

2人の男に向かって悪戯な笑みを浮かべながら、りのりすさんは退店する。

「ありがと〜、ご馳走様で一す♥ ふふ、うふふ♥」

牙にも見える八重歯をちらりと覗かせて、くすりと彼女は笑った。

背後を振り向くのも、彼女の瞳を見詰めるのも怖かった。

不可解な、彼女に都合の良いすぎる突然の幸運。幾ら容姿が良くても納得はしがたい。

「はい。い、イヨ、キニシナイデネ」

退出間際に聞こえた男性の返事は、またカタコトに戻っている様な気がした。
賑わっていた2人の男達の食卓は、不気味なまでに静まり返っていた。

「ほら、有坂さん♥ 早く次行きましょう？ カ・ラ・オ・ケ♥」

改めてこちらを見て、提案する彼女と眼差し不意にが重なった。
警戒していたのに、彼女は覗き込むようにしてくる。隙があれば、何度も何度も。

とはいえ、その瞳に異常はない。

確かに綺麗な瞳は現実離れした宝石の様な美しさ。よく吸い込まれそうな瞳なんて比喻があるが、正しくその言葉通りの透明感のある眼差しだ。ただの綺麗な目、この世の人間の美貌にしてはちょっと過ぎていると思うくらいで、作り物めいた精巧さと美しさだが存在しないとは言えないだろう。その煌めきを数秒見つめてみた所で異変はない。彼女は何をするでもなく、相変わらず僕にしがみつく様にしながら唇をぷう、と尖らせて急かして来る。

「ほら、時間がもったいないですから早く行きましょうよ」

容姿の良さだけで全てを説明するにはあまりにも無理がある。

幾ら見目麗しいとはいえ、例えばこんな事が起こる事をTRPGなんかで提案されたら却下してしまうかも知れない。それほどまでに違和感がある出来事だった。とはいえ、彼女をさておいて帰るのも違うような気がしてつい流されてしまう。

確かに愛嬌もあれば、人を魅了する不思議な存在感こそあるが、先程のあれは——それこそ魔法だとか、漫画の中のサキュバスの魅了なんかを思わせる。偶然にしては出来すぎていた事の運び、その不可思議さに首を傾げながらも歩を進める。それこそアニメや漫画の世界みたいな超常的な何かが起こっている様な不可思議さに、空恐ろしさはあれど不思議と好奇心が湧き立っていたのも事実だった。

「あれ？ 有坂さん？」

彼女をみたま思案していると、ふと彼女がこちらを見る。
不意に目線を合わせるのが怖くなって目を逸らした。
彼女は僕を見て、不思議そうに首を傾げつつも僕の頬をぺちぺちと軽く触った。

「きいてますか？ ねえ、有坂さーん？」

それがもし、何らかの力が『効いてますか？』なら本当に怖い。常識的に考えれば『聞いてますか？』に違いないが、そんな事を考えてしまう。僕はこくりと頷き足早に歩く。なるべく視線を合わせない様、並ばれないように急いでみる。

彼女はとてとて走って手を繋ごうとしてくるが、その手を取るのは気が引けた。
彼女の手や腕を掴むのは、なんだか逃げられなくなりそうな気がしてしまう。

「あ、良かったあ♥」

屈託のない笑みを浮かべた彼女、その何かに魅了されたら最後、あの男の様になるのでは——何か、操られてしまうのではないか——不可思議な邪推が胸の中を過った。
そんな僕の内心はさておき、彼女は追いついてきてまたしがみついてくる。
歩きにくい、かといって振り払うのも憚らない。

僕は出来る限り、彼女を見ない様にしたまま街並みを歩いていく。

リリさんは相変わらず、やたらと積極的にベタベタとひっついて来る。狭い道や人混みでもないのに、これみよがしに見せつける様に彼女でもしないだろう距離感で接してくる。

すぐ耳元で声が鈴鳴りの様な声が響く。彼女は僕の腕にしがみつく様に抱きついたまま、すりと頬擦りまでしながら次から次へとキャピキャピと話しかけてくる。

距離感が明らかに友達以上の近さ。甘々のカップルでさえしないだろう、段階飛ばしの振る舞いは見た目とは裏腹な尻軽さを感じさせる。一体どうしてこうなのか、不躰だが聞いてしまいたい、問い質したい気もしてしまうが上手く話題を躲かれる。

「ほら、此処だって～アプリ通りに着いたね～♡」

スマホを見せるにしても距離が近い、抱きついたまま軽く跳ね、勢い付けて寄ってくる。

胸元の谷間が覗き放題も同然だ。やたらと甘い良い香りがふわりと香っては思考力を奪ってくる。甘だるい、そんな言葉が似合う程の濃密すぎる香りだが不快感は薄い。最初会ったばかりの頃感じていたフルーティな香りとは違う、よりはミルキーな香りが強まっているのは歴然だった。香水というのは匂いが変わるらしいが、それにしても薄れる様子はない。キツイ香水臭という程ではないが、石鹸や何かの匂いというには強い香りだ。

至近距離での彼女の香りは詰められている距離感以上に増している気がする。色白の肌は普通にしているだけでも頬に赤みが差していて、ともすれば上気している様にも見えてしまう。こちらを見詰めるくりくりと大きな瞳が上目遣いで迫っては、覗き込む様にして迫ってくる。幾ら身構えても想像以上の踏み込みを繰り返してくる彼女を前に、僕の平常心は揺さぶられてばかりだった。

身体は否応なしに反応しそうになるし、それを誤魔化し隠すだけでも精一杯だった。

僕達2人はカラオケに到着し、予定通りに二人部屋に入る。

その矢先、ドリンクバーを取りに行くよりも早く彼女は座る僕の目の前にやって来る。

「曲、入れても良いけどさあ……♡」

不意に香る彼女の香りに、くすぐられ続けた雄としての象徴は限界になっていた。

荷物を下ろした僕に向けて両手を広げながら彼女が迫ったかと思えば、その先端をもにものと揉まれる様な感覚。彼女は何の臆面もなく僕の男根をズボン越しに撫でている。

出口を塞ぎ、逃さないとはばかりに半ば覆い被さる彼女の距離は今日1番の至近距離、目と鼻の先に彼女の顔、そして瞳が迫っている。遠慮なく僕の懐に入り込んで、顔を迫らせ視線を強引にでも合わせてくる。広がる甘い香り、その濃さがぐっと増して、脳裏を甘いという情報が所狭しと埋め立てていく。意識が持たない、甘さの彼方に吹き飛ばされそうになる。

だが、僕は必死に耐える。理性を保つべく引き剥がそうとするが抵抗される。

思ったより力もある、見た目から感じる重さ以上のどけにくさがある。容姿の愛嬌と、そしてそれをしようとは思わせない不可思議なまでの存在感。逆らってはいけない、そんな気配が彼女という存在のビジュアルから香っている。それは思考力を奪う香りが殊更に補強して、鮮烈で確実な印象として僕の選択肢を奪っていく。

そして、その状況に理解を追い付かせ、思案するのも一杯一杯な合間にも彼女は動く。

「ねえ——」

彼女が囁く、ぞくぞくと全身がこそばゆい震えに包まれ、多幸感が込み上げる。

かち、かちと微かな金属音が2つ続く。それは彼女の衣服を止めるホックの音。
気付いた時にはもう、彼女はふりふりの上着をはらりと崩し、腰を丸出しにしていた。

「挿れてよ、私の中にさ♥」

彼女は剥き出しにしているその恥裂を右手のピースでクパクパと動かして、誘う。

脱いだパンツ、女子の下着がそこにはある。ねっとり糸を引く愛液、どろりとした何かがこびりついているそれが床に落ちるや否や、その部屋の中に漂う彼女の甘い香りは何倍何十倍にも強まった様な気がした。

流石にこれはまずい、咄嗟に僕は言い返す。

「そんな、何を急に……此処、カラオケだよ！？」

しかし――、

「『良いからきいて』♥」

彼女と視線が合ってしまった。

モニターでコマーシャルだけが明滅する薄暗い部屋の中、彼女の瞳が薄ぼんやりとした蛍火色に光っていた。モニターの照り返しにしては明らかに異色、どうみても画面に写っては居ない鮮烈な黄緑色。その眩しく怪しい色の光が彼女の瞳の中、ぐにやりと歪み蠢き渦を巻くようにくるくると回りだす。

その視線が、声が、香りが、何もかもが思考を染める様に強烈で、眩い。

油断すれば頭の中が真っ白になりそうになる、そんな危うさ。

彼女の声が、そんな僕に追い打ちをかける様に耳元をくすぐってくる。

指先がトントンとズボンに張った TENT を小突き、弄ぶ様にくるくると撫で回してくる。

「良いから、早く味見させてね♥」

瞳の中の光、蛇の様な紋様が怪しく不規則なうねりを伴いながら光る。

段々意識が朦朧としていく、繰り返しツンツンつつかれ、もにもにと揉まれる男根の感覚だけが際立っていく。思考がまとまるより早く、意識を駆け抜ける鈍い快楽と膨れていく欲情の衝動が思考を苛んでくる。

会ったばかり。男同士だった筈のオフ会に現れた不可思議な美少女に口説かれている。

そんな事実の些事が霞んで、ただ可愛い子に呼ばれ、頼まれ、誘われている――そんな現実味の無いこの状況、それに従わなきゃいけない様な、答えねばならない気がするという不可解な使命感が胸と思考を埋め立てていく。僕は、彼女に今決断を迫られている。

そして、それに流されていていいと、存外そんな気持ちに支配され始めていた。

「きっと分かるよ、全部どうでも良いってさ♥」

桜色の唇が耳元で揺れる、ぷるぷるとして柔らかそうな少女の小さな口が囁く。

僕の胸元に手を当て、乳首をくるくると焦らす様に人差し指でなぞりながら続ける。

一方的に言葉を流し込まれる、誘惑され続ける。危機感が希薄になっていく。

「頭の中ぐちゃぐちゃになるくらいさあ、幸せになる？♥」

もわっと浴びせられる息すら、甘く香しい蠱惑の色を宿している様に感じる。
瞳のうねる模様、その渦巻きに意識が吸い込まれる様に奪われていく。
ともすれば、何も考えないまま従ってしまいそうで、気が付けばベルトを緩めていた。

「あは♡ そうそう、えらいえら～い♡ いい子いい子♡ ほら、キスしょ♡」

彼女に撫でられた瞬間、それだけで多幸感で頭の中に電流が弾ける様な気がした。
流されそうになるも、ハッと正氣に戻って唇をかわす。

しかし、彼女はすかさず僕の右手を掴み、左手ごと肘で抑え込む様にしてくる。
急にぐっと力を込められるのを感じる、全力で抵抗するがビクともしない凄い力だ。
その華奢な身体、枝の様に細い女性の腕から押し返される力の強さとは思えない。
僕の力が抜けているのか、彼女が本当に力が強いのか、両方かも知れない。

腕の自由を取り戻そうと抵抗するまま、力を絞り出しつつ僕は声をあげた。

「くっ、なに、するんだ……よ！」

しかし、やはり彼女の腕は固定されたかの上に動かない。
抑え込まれる腕も、ググッと強い圧で押し込まれるまま、僕はされるがままだ。

（普通の、力じゃ……ないっ！？）

「あは、あははは♡ 良いじゃん、気持ち良くしてあげるからあ♡
ね、サービスしてあげるから♡ ロでも膣でも好きにしてよお、えへへ♡」

すかさず彼女が僕のズボンのチャックを下ろす音が響く。
そのまま強引にぐい、ぐいとズボンもパンツもずらしながら、にへへと笑う。
緩んだ笑みは恍惚に歪み、眼差しは獰猛な煌めきを爛々と湛えている。
ぎゅっと彼女が魔羅を握ると、僕の意識は絞られる様に遠のいてしまった。

「大丈夫、すぐに良くなるから、何もかもがどうしても良くなってえ♡ えへ♡」

舌舐めずり、意気揚々と獲物を捕食する捕食者の態度だ。彼女は完全に僕を掌握し、そのまま組み伏せんとばかりに強引に脱がせてくる。すんすんと鼻を鳴らす音、もう我慢できないと言わんばかりにくぐもった吐息を『はっ♡』と吐き出している唇。彼女は聞く耳を持たないまま、僕の事を思うがままに追い詰めてくる。

強引に突き飛ばそうにも、彼女の力で腕は動かないし、身動きが精一杯だ。
抗おうにも、もがくだけで精一杯、彼女に一方的にされるがままの状態だ。

そんな中、彼女が深々と僕の胸元、そして股間付近に頭を沈めてくる。
剥き出しにされた男根に彼女の吐息がかかる、その度怒張は僕の意味抜きに強まる。
遊ばれたのもあり、バキバキに漲っている息子の先端を彼女の鼻先が掠めた。

「んっ、んんう～♡ あはあ……♡ はあー……♡
くんくん、くんくん、すうううー……はああ……んあ、サイコお♡」

「や、やめっ、そんなトコ、だ——」

制止する間にも、彼女は止まらず思うままに僕を食る。
その鼻先が触れた後、開いた唇の上下で引く唾液の糸が先端に絡まる。

「うあっ！」

つい声が漏れる、その瞬間に先端に感じる圧力。

彼女の唇が触れていた、そしてそれだけじゃない。キスを『ちゅっ♥』とひとつしたかと思えば、
亀頭の先端をぱくぱくとはむように唇で刺激して、次の瞬間には先端だけを包んでチュルチュル、ずるずると勢いよく不意に嚙り上げてくる。思ったよりも強い吸引力、先端から何かを引きずり出すかの様な感覚に、また僕は不甲斐ない声を漏らしてしまう。

「ずずっ、ずちゅるるう——んぱ♥ くちゅ、くち、くちゅ、んんんう——う♥」

「ふあっ！！？ な、なに、なにになになになに！？」

不意打ちに次ぐ不意打ちに戸惑う中、彼女の一方的な攻めは続く。

改めて先走りも漏れ、濡れ始めた男根に鼻先をクリクリと擦り付けてくる。

枝垂れる髪の毛、その先端が時折ちくりとするのも痛気持ち良い。なびくままに流れ、擦れる感覚がまた別な刺激として僕の思考力を絡め取っていく。解けぬ快樂の糸、僕の中から思考力が抜き取られるままに意識を解かれ、絡め取られていく様な感覚。されるがまま、しかしそれも良いのではと流されそうになってしまうだけの快感が背筋から脳髓までを駆け抜け、後もう少し浸りたいというタイミングで引いていくのを繰り返す。

「んふふ、ちゃあんと雄の匂いだあ♥ 美味しそお〜♥

さっきのご飯なんて無味無臭じゃん、このおちんちんやチンカスの方が何倍なあん倍もいい匂いで美味しそうかも♥ はあ♥ あはあ♥ 美味しそう、美味しそう♥ おいしそう♥ 頭の中全部おいしそうでいっぱいいっぱいなんだけどお、あはあ♥」

涼しい声色がどんどん蕩けた甘いものにな変わっていく。

透明感を宿したまま、甘い響きがねっとりと絡みつく様に脳内に浸透してくる。

「すんすん、すんすん……ふああ♥ あは、脳イキシそ♥

あっ、ああっ——脳イく♥ 腰イく♥ だめ、我慢できない♥

頭の中、シたいにいっぱい♥ 無理、ムリムリムリムリい♥ あ、あ——♥」

こくんと、突如微睡む様に首を下向きにする。かと思えば、急に頭を起こす。

「えへ、えへへ……あ♥ 分かった、”入って”きた——♥」

爛々と輝く瞳を見開いて、一度そう呟いた後、彼女は何も言わずに腰を上げる。

そしてそそくさと僕の身体をソファの背に押し付け、そのまま組み敷く。

「っ、あっ、な、なん……だっ……！？」

抵抗するが意味はない、ただ彼女が男根を自らの女陰にあてがうのを見守るだけ。

「ふふ♥ あは、あはは♥ うん♥ 挿れなきゃ、挿れるねっ♥ 食べちゃうから♥」

彼女の膣口に亀頭が触れたかと思えば、『頂きまあす♥』の声と共に呑み込まれる。

股口の圧迫感が男根の先端に触れたかと思えば、同時に何か、にゆるりと濡れたうねる物体が亀頭の溝に這い絞り取るように巻き付いてくる感覚がある。不可解な感触だが、不快では無く心地が良い塩梅だ。その状況を確認しようにも、彼女の腰に男根が吞まれてしまう方が早く、僕は何がなんだか分からない間に最初の絶頂へと導かれてしまう。

「ああ、んああ♥ びくびくしてるう、あん♥ びゆるびゆる、きてるう♥」

未知の快楽に絡め取られるまま、僕の男根は彼女の中に吞まれていく。こういった行為を再現する玩具とは別格の圧迫感、彼女が特別なのか、それとも何かが起こっているかは分からないが意識を手放しそうになる程の電撃的な快楽が背筋を駆け上っていく。

堪らず震える腰を、彼女がグイと押し付けてくる腰が強引に抑え込んでくる。

「はっ、っあ、んぐっ、こ、これ……なに——」

締め付けられる感覚だけで脳天まで真っ白になりそうだ。

理性というものに形があるとしたら、きっとチューブから絞り出される様に溢れてしまっていくだろう、そんな脱力感が快楽の電流と共に脳を支配していく。彼女が腰を動かす度に繰り返す水音、それがまるで僕の意識を啜るかの様に、単なるパチュパチュとした音からグチュグチュ、ズチュズチュ、ズチ、ズチといった重く粘っこい音に変わっていく。その度に意識ごと、どこか遠い宇宙の果てまで啜り上げられる様な感覚を覚えてしまう。

絶頂感のまま、抵抗の意思を表するより早く行動と思考を支配されてしまう。

「これはねえ、セックスだよ♥ お食事、君をっ♥ 食べちゃう♥ セックス♥」

腰振りに合わせた途切れ途切れの言葉が彼女の口から続く。

僕の魔羅を咥えたままの腰をゆっくりと、あるいはズンと勢いよく下ろして来る。その緩急にも振り回され、僕の意識は確とした輪郭を取り戻すより早くぼかされていく。彼女の股から聞こえる断続的な水音、そしてたまに竿が抜ける度にぶぽ、ぐぷ、ぐぷとガスや何かが溢れる様な音が響く。そして続く垂れる温もりが肌を濡らしていく感覚。

「っ、ああっ！！ んん、ああああっ！」

彼女との行為は確かに気持ち良いが、あまり行為自体を楽しむ余裕はない。

対して彼女は、さぞかし心地良いのだろうとろんと瞳を細めた赤ら顔でよがっている。

ぱちゅ、ずちゅ、続く水音は止まず、それが彼女が満足しきっていない事を示していた。

「あっ♥ ああん♥ さいっこお〜♥ おおお〜♥ ふいい♥」

存分に欲望を貪るまま、髪を振り乱す彼女。その熱い吐息がそのまま顔にかかる。

甘い匂いが鼻先を満たし、鼻腔に雪崩込んで脳内を染めていく。

途端に感じる快楽が鮮明に、刺激的に強まって意識が遠のく距離が増す。

その速度、往復の高低差が何倍にも鮮明に、強烈になって意識を揺さぶり、振り回す。

（あっあ、ああ、あ——や、やばい、気持ち良すぎ、て——っ！！）

本当に搾り取られてしまう、そんな気さえするが彼女の勢いは止まらない。

むしろ、もっと僕の全てを絞らんとばかりに加速していく。好き放題に腰を振って、果てたら止まってまた動くの繰り返し。不規則な高速搾精と焦らす様な緩みがランダムに襲ってくる、猛烈に思考を奪われては手放され、快楽の最中に放たれ放置されては戻される。快楽に対して初めて危機感を抱いたかも知れない乱暴な絶頂感の嵐が自我を蝕み、貪っていく。

「はあっ♡ はあ♡ きもちい、美味しい♡ もっと、もっと頂戴♡
はやく、はやく♡ もっとおまんこに出して、君の全部出してっ♡」

また、息もつかせぬ間に激しいピストンが始まる。

彼女の腰の動きとはまた別なリズム、不意に遅れて男根に絡みついた何かがシュルシュルと巻き上げる動いては追い打ちをかけて来る。摘み上げられる様に意識を練られ、持ち上げられたかと思えば今度は彼女の深いピストンが始まる。魔羅を根本まで飲むほど、がっつり亀頭が外気に触れる程に腰を持ち上げたかと思えば不意に彼女は腰を落とす。

ズンと音がしそうな勢いと深さ、途端に僕は快楽に浮かされた思考を真逆の底に沈められる。ベクトルの違う快楽の押収、その往復を繰り返す度に僕は呻くだけの肉人形にされていく。強引に浴びせられる暴力的な快楽はそれこそ、意識が刈り取られる程という言葉が似合う程。轢かれる様な乱暴な騎乗位に僕は叫んだ悲鳴混じりに犯されるしかない。

快楽の津波に吞まれるというのは、正しく本当にこんな状態を言うのだろうと思う。

「ふあ、ふわあああっ！！ あっあ、ああ、うあああああああっあっあっあ！！」



～試読あとがき～

この時点で本編の半分前後です。

～ 活動紹介 ～

◆ Skeb

<https://skeb.jp/@yuxis>

◆ VRChat向け3D販売

<http://yuxis.booth.pm>

<http://unois.booth.pm>

